

# オホーツク海におけるマツカワの放流試験

網走水産試験場

## 研究の目的

オホーツク海においては、ホタテガイ、サケに次ぐ栽培漁業対象種としてマツカワが注目されている。そこで、オホーツク海におけるマツカワの放流効果を明らかにする。

## 研究の成果

- ① 93年から98年の放流群の平均再捕率は、約14%であり、高い（表1）。
- ② 放流サイズ（平均全長）が大きいほど、再捕率が高い（図1）。
- ③ しかし、商品サイズ（40cm以上）の再捕率は、2%程度であることが大きな問題である。
- ④ オホーツク海において、成長は早く2歳魚の秋には全長40cm、体重1kgになる（図2、3）。
- ⑤ その成長は、雌の方が雄よりも早い（図4）。
- ⑥ 販売単価は、1,500～2,000円/kgであった。

表1 マツカワの放流数と再捕率（オホーツク海）

年群	放流年月日	放流尾数	放流海域	累積再捕数	再捕率(%)
93年群	1993年11月11日	1,000	能取湖	31	3.1
95年群	1995年12月6日	865	網走藻琴16m	104	12.0
96年群	1997年7月7日	475	網走藻琴41m	157	33.1
97年群	1997年11月21日	2,123	斜里50m	380	17.9
98年群	1998年12月7日	1,552	ウトロ岩尾別40m	26	1.7
99年群	1999年12月9日	709	常呂30m	23	3.2
00年群	2000年12月7日	1,059	網走藻琴27m		
93-98合計、平均		6,015		698	13.6

2001年5月23日現在

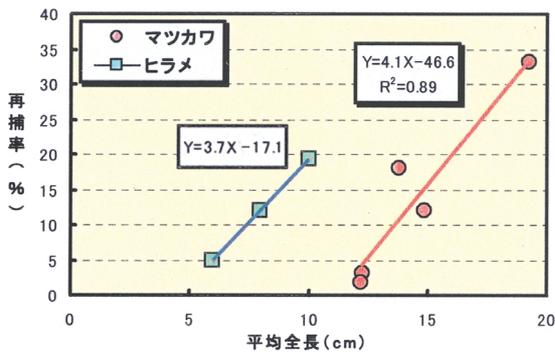


図1 放流サイズと再捕率の関係

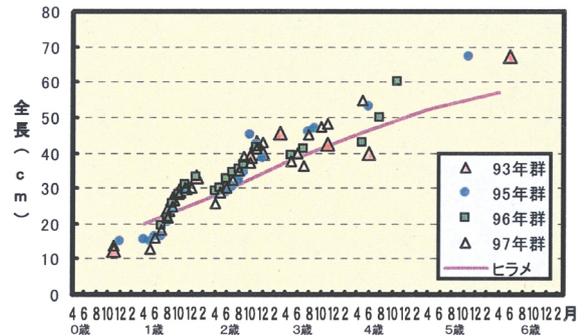


図2 マツカワの成長（全長）

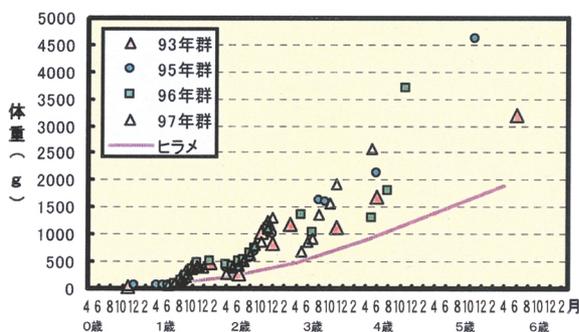


図3 マツカワの成長（体重）

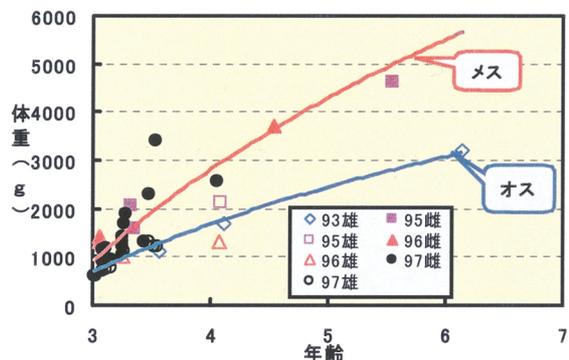


図4 雄と雌の成長差

# 潜砂行動から推定したハタハタ種苗の放流サイズ

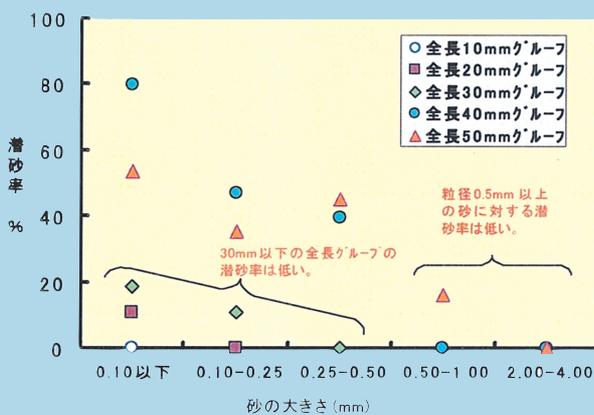
栽培漁業総合センター

## 研究の目的

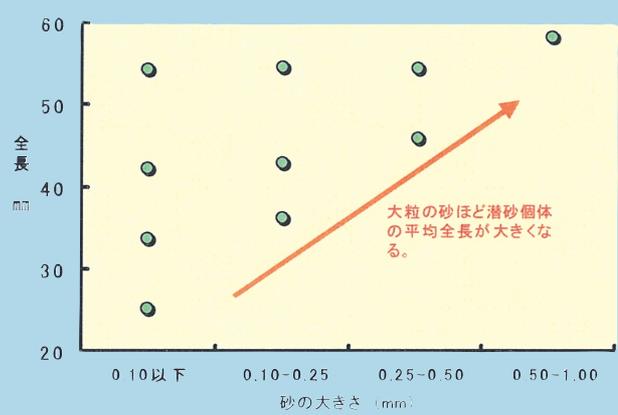
ハタハタの種苗放流は種苗生産技術の進歩により盛んになってきたが、人工種苗の再捕は少ない現状である。ハタハタの生存にとって、砂に潜ること（潜砂）は補食のためや外敵からの防御などのために重要である。そこで、放流効果を上げるために、ハタハタの潜砂行動に着目して、砂の大きさ（底質粒径）と放流サイズとの関係を明らかにする。

## 研究の成果

- ① 大粒の砂ほど潜砂個体は少なく（図1）、潜砂個体のサイズが大きくなった（図2）。
- ② 全長30mm以下の稚魚の潜砂率は低かった。また、粒径0.5mm以上の砂では全長に関係なく潜砂率は低かった（図1）。
- ③ ハタハタ種苗は小粒の砂を選択して潜砂する傾向があるため、放流海域には底質粒径の小さい海域を選定する必要がある（図3）。
- ④ 底質粒径が0.5mm未満の海域に放流する場合には、適当な種苗の全長は40mm以上と推定された（図2）。
- ⑤ 底質粒径に応じた放流サイズを明らかにしたことは、今後の放流技術開発の資料として期待される。



餌料海藻別に飼育したウニの平均殻径の経時変化



餌料海藻別に飼育したウニの平均殻径の経時変化



写真1 潜砂個体と遊泳個体

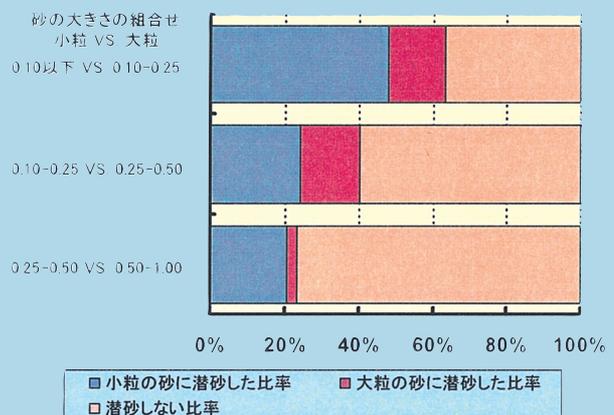


図3 底質粒径の選択試験